

2. 日本における社会的排除指標の計測の試み

日本における社会的排除指標の計測の試み

データ1: 2006年「社会生活に関する実態調査」

- サンプル数=584
- 対象者: 東京近郊のX市において住民基本台帳より無作為抽出した成人男女1,600人

データ2: 「2008年社会生活調査」

- 実施年月: 2009年2月
- サンプル数=1,021
- 対象者: 全国の無作為抽出した地区の成人男女1,320人(地図方式)

調査の設計

- 経済的困窮のみならず、社会的困窮も把握すること
- 社会における様々な公的constructsから排除されているさまを把握すること
- 公的のみならず、私的な領域からの排除も把握すること
- 個人の社会における活動度も把握すること
- 各項目の「欠如」は非自発的なものであること(自発的, i.e. 選好による欠如を除くこと)=強制された欠如
- 非自発的な欠如の理由は、金銭的なものに限らないこと(身体的、健康、時間、体裁、・・・)

8つの次元 (Table 2 – page 8)

1. 基本ニーズ (Basic Human Needs)
2. 物質的剥奪 (Material Deprivation)
3. 制度からの排除 (Exclusion from Systems)
4. 社会関係(ネットワーク)の欠如(Lack of Social Relations)
5. 劣悪な住居(Lack of Adequate Housing)
6. 社会参加(レジャーと社会活動)の欠如(Lack of Activities)
7. 経済的ストレス(Economic Stress)
8. 所得ベースの相対的貧困(Income Poverty)

社会的排除指標の定義(次元別)

$$S_i^x = \frac{\sum_{j=1}^{J_d} d_{ij} w_j}{\sum_{j=1}^{J_d} w_j}$$

$S_i^{(1,2,3...7)}$ = Social Exclusion Index of Dimension (1,2,3,...7) for individual i

J_d = Number of items in Dimension d

x = Dimension 1,2,3,...,7

d_{ij} = 1 if individual i is deprived of itemj, otherwise 0

w_j = weight (propagation rate) for item j

- 各itemの普及率でウェイトづけした欠如率
- 欠如 = Does not include those by preference

基本統計量 (Table4)

Table 4 Basic statistics: Social Exclusion Indexes

Dimensions	# items	Social Exclusion Indexes (standardized)		Percentage of Respondents who are Excluded (Deprived)	
		Average	Std. Dev.	Threshold (# items)	%
Lack of Basic Needs	6	0.051	0.139	1	16.6%
Material Deprivation	9	0.010	0.043	1	6.3%
Exclusion from Systems	14	0.072	0.108	3	14.5%
Lack of Social Relations	9	0.099	0.187	3	12.0%
Inadequate housing	8	0.028	0.081	1	14.9%
Lack of Activities	5	0.346	0.278	4	12.5%
Economic and Financial stress	8	0.109	0.160	2	20.0%
Income poverty	1	296.8	487.487	114.6	10.9%

(*)The threshold for determining who is 'excluded' was determined by the author, to ensure that the exclusion rates will be 10% to 20% of the respondents, except for the material deprivation.

- 各項目の排除指標の絶対値にはさほど意味はない
- 排除率の計算のための「排除線」は、10~20%になるように設定

誰が排除されているか (Table 5)

- リスク・グループは、低所得のリスク・グループとは異なる
- 性別差は少ない
- 年齢別では、20歳代
- 雇用形態別では、正社員は多くのDimensionで low risk, 非正規 high risk
- 主婦、退職者を除く無職者は、very high risk in all dimensions
- 低学歴も、at risk in many dimensions
- 男女ともに、未婚、離別は at risk

過去の不利な経験 (deviation from the normal life course) と現在の社会的排除

- 先行研究:
 - 子ども期の貧困の影響: 阿部(2007)、大石(2007) 15歳時の生活意識が(現在の社会的排除)、(現在の所得)に影響、小塩他(2009)15歳時の貧困が現在の貧困に影響
 - 海外では、子ども期の貧困と成人後のwell-beingの関係を示唆する分析は多数。
 - Hobcraft(2002) 子ども期の家族形態、父親の職業階層などが現在の社会的排除を(maybe)表す outcome(所得、ホームレス、失業)に影響

ロジスティック分析

- 過去の不利: 15歳時点で生活保護にかかっていた、15歳時点の生活意識(5段階、自己申告)、低学歴、離婚歴、長期の疾病・怪我(1か月以上学業または仕事に影響があった)、非自発的失業、1年以上の失業経験
- 被説明変数: 社会的排除(排除指標 > 排除線)(7dimensions)
- コントロール変数: 等価世帯所得、性別、年齢、単身世帯、子どもあり(17歳以下)、雇用形態

結果 (Table 6)

- 多くのDimensionにおいて、「過去の不利」は+significant (特にLack of Basic Needs)
- 「過去の不利」な体験が社会的排除のきっかけとなっている?(例: 長期失業→社会関係の欠如)
- 経済ストレスは、所得だけでは説明できない?
- 生活保護歴は、制度からの排除の確率を4倍に(そのメカニズムは??)
- 子ども期の貧困は、所得をコントロールしても影響が残る

3. 相対的剥奪 (Relative Deprivation) の計測の試み

相対的剥奪の概念

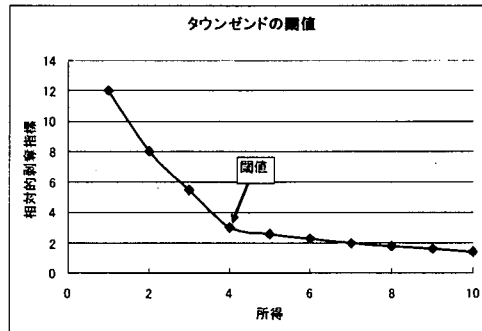
相対的剥奪とは「人々が社会で通常手にいれることのできる栄養、衣服、住宅、居住設備、就労、環境面や地理的な条件についての物的な標準にこと欠いていたり、一般に経験されているか享受されている雇用、職業、教育、レクリエーション、家族での活動、社会活動や社会関係に参加できない、ないしはアクセスできない」(Townsend 1993, p.94, 訳は柴田1997, p.8) 状態

- Townsend(1979) “decent life (まっとうな生活)” をおこなえない状態
- Sen(1987) “without shame (恥がなく)”, “decent life with dignity (尊厳を持ったまっとうな生活)”

タウンゼンド（1979）のオリジナル相対的剥奪指標

- 12分野（食事、健康、住居、職場環境、社会環境など）の60項目を選定。その有無を調査。
- 「ない」と答えた項目数＝相対的剥奪指標

- 所得と剥奪指標の関連を分析。世帯構成ごとに、ある特定の所得点（閾値、限界点）で、不釣り合いに湾曲→
この点こそが貧困基準



相対的剥奪（Relative Deprivation）の利点

- 文字通り「相対的」概念
- 「期待される」活動や生活様式を具体的にリストアップ → 貧困の具体例を示すため、一般市民にもわかりやすい（直観的）
- 直接に生活の質を計測 → 貯蓄や資産など、フローのみでなく、ストックをも考慮。また、金銭的以外な資源（社会ネットワークなど）も自然に反映。
- 生活活動のリストが「最低限の生活」を表すものであれば、リストそのものが「剥奪線」となる（新たに剥奪線を決定する必要がない）

相対的剥奪指標の改善

- 強制された欠如(enforced absence)と嗜好による欠如(preference)の区別
(解決方法) 質問票の工夫
- 項目の重要性の考慮
(解決方法) ウェイト付け
- 恣意性の排除
(批判) 指標の構築に用いられる項目リストが研究者によって恣意的に選定されており、意味を持たない
(解決方法) 項目リストの選定自体を社会に問い、客観性を確保 (社会的必需項目 = Socially Perceived Necessities)

社会的必需項目の概念

- [調査の] 第一そして最も重要な目的は、1983年のイギリスにおいて何が許容がたい生活水準 (unacceptable standard of living) であるかについての社会的合意があるか否かを検証することであり、もし、合意があるのであれば、誰がその水準以下に落ちているのかを分析することである。この背後にあるのは、現在の世論(public opinion)において最低限必要とされる生活水準以下にある個人は「貧困」であるという概念である。この最低限の生活水準 (必要) には、食料など生き延びるために必要な必需品のみならず、社会的役割を担い、社会に参加するために必要なアクセスなども含まれる。(Gordon & Pantazis 1997、下線は筆者)

社会的必需項目の構築

平成14年「福祉に関する国民意識調査」
 全国成人男女2,000人対象（有効回答数=1,350）

現在の日本の社会において、ある家庭がふつうに生活するためには、最小限のようなものが必要だと思いますか。ここにあげる項目について、「絶対に必要である」「あったほうがよいが、なくてもよい」「必要ではない」の中から、あなたのお考えに近いものをあげてください。

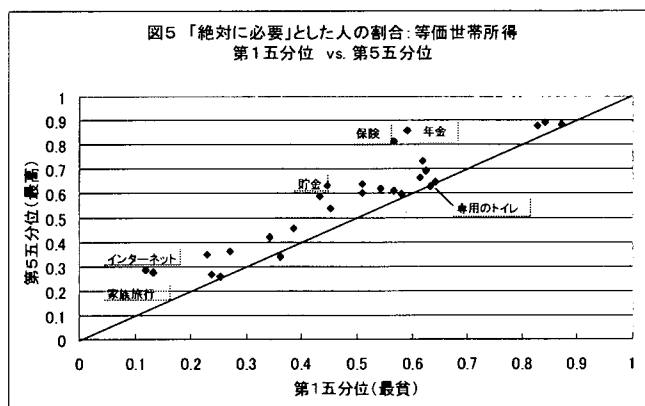
(1)「少なくとも一日1回の果物」については、どうですか。

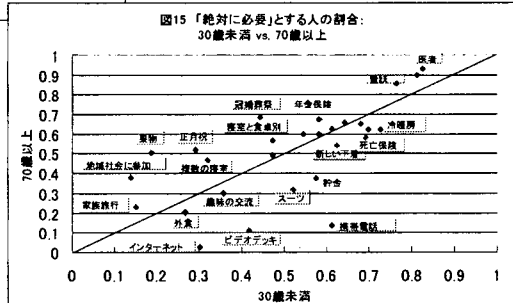
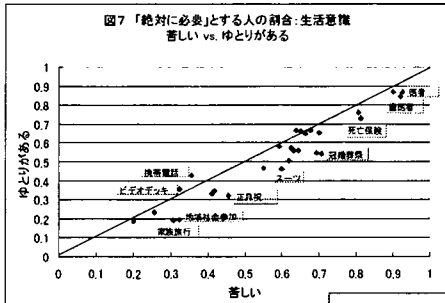
【注：(2)～(28)も同様に聞く】

(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
絶対に必要である	あったほうがよいが、なくてもよい	必要ではない	わからない

社会的合意は存在するか？

図5 「絶対に必要」とした人の割合：等価世帯所得
 第1五分位 vs. 第5五分位





	希望するすべての子どもに絶対に与えられるべきである	与えられたほうが望ましいが、家の事情(金銭的など)で与えられなくてもよかった	与えられなくてもよい	わからない
朝ご飯	91.8%	6.8%	0.3%	1.1%
医者に行く(健康も含む)	86.8%	11.2%	0.6%	1.4%
歯医者に行く(歯科検診も含む)	86.1%	11.9%	0.6%	1.4%
遠足や修学旅行などの学校行事への参加	81.1%	16.8%	0.7%	1.3%
学校での給食	75.3%	16.6%	4.7%	3.4%
手作りの夕食	72.8%	25.3%	0.8%	1.2%
希望すれば、高校専門学校までの教育	61.5%	35.2%	1.6%	1.7%
絵本や子ども用の本	51.2%	43.8%	2.9%	2.1%
子どもの学校行事や授業参加に親が参加(希望すれば)短大・大学までの教育	47.8%	43.8%	5.9%	2.4%
(希望すれば)短大・大学までの教育	42.8%	51.1%	4.2%	1.9%
お古でない文房具(鉛筆、下敷き、ノートなど)	42.0%	48.7%	7.1%	2.2%
少なくとも一足のお古でない鞋	40.2%	51.2%	6.4%	2.2%
誕生日のお祝い(特別の夕食、パーティ、プレゼントなど)	35.8%	52.4%	9.7%	2.1%
1年に1回くらい遊園地や動物園に行く	35.6%	53.6%	8.3%	2.6%
少なくとも一組の新しい洋服(お古でない)	33.7%	55.8%	8.7%	1.9%
友達を家に呼ぶこと(小学生以上)	30.6%	56.3%	9.9%	3.1%
適当なお年玉	30.6%	56.3%	10.5%	2.6%
クリスマスのプレゼント	26.5%	52.7%	18.5%	2.3%
適当なおこづかい(小学生以上)	23.1%	61.5%	12.9%	2.5%
子ども用の勉強机	21.4%	57.0%	19.3%	2.2%
自転車(小学生以上)	20.9%	60.4%	15.7%	3.0%
数年に1回は一泊以上の家族旅行に行く(海・山など)	20.7%	58.6%	17.7%	3.0%
子ども部屋(中学生以上、兄弟姉妹と同居も含む)	17.0%	64.9%	16.1%	2.0%
親が必要と思った場合、塾に行く(中学生以上)	13.7%	54.6%	27.4%	4.3%
少なくとも一つくらいのお稽古事に通う	13.4%	53.3%	30.6%	2.6%
周囲のほとんどの子が持つスポーツ用品(サッカーボール、グローブなど)やおもちゃ(人形、ブロック、パズルなど)	12.4%	65.9%	18.7%	2.9%

注：色がついているのが、50%以上の支持を得られた項目
 データ元：『児童必需品調査』(2008)(対象 20歳以上の成人1,800人) 出所：阿部彰(2008)
 出所：阿部(2008)

表6-2 イギリスにおける子どもの必需品の支持率(1999)

項目	「必要である」とする割合(%)
暖かいコート	95%
新鮮なフルーツまたは野菜	94%
新しく、足にあった靴	94%
特別な日のお祝い	93%
自分用のベッドと毛布	93%
一日3回の食事	91%
趣味やレジャー活動	90%
自分の本	89%
学校の制服	88%
集団活動(プレイグループ)(1週間に1回)(未就学児)	88%
おもちゃ(人形、ぬいぐるみなど)	84%
少なくとも7枚のパンツ	83%
教育用のゲーム	83%
水泳(1ヶ月に1回)	78%
子ども部屋(10歳以上)	78%
肉、魚、または惣菜主産者用の代替品(1日2回)	77%
学校の遠足(1学期に1回)	74%
テーラー、カーディガンなど4着	73%
1週間以上の旅行(1年に1回)	71%
お古でない洋服	70%
少なくとも4足のズボン	68%
遊ぶことのできる庭	68%
寝るためのカーペット	67%
おもちゃ(ブロックなど)	62%
レジャー用の道具	60%
友達を家によぶ(2週間に1回)	59%
自転車(お古も含む)	55%
少なくとも1週間50ペンスのおやつ代(おこづかい)	49%
勉強のためのコンピュータ	42%
コンピュータ・ゲーム	18%

元データ: 1999年「Omnibus Survey」(対象: 世帯主 1855人)
出所: Gordon et al. *Poverty and Social Exclusion in Britain* (2000)

出所: 阿部(2008)

相対的剥奪指標に用いられた項目とその普及率

社会的必需項目(16項目)	(2008年)		参考(2003年)	
	普及率*	欠如率	普及率*	欠如率
設備				
電子レンジ	98.0%	2.0%	98.4%	1.6%
冷暖房機器(エアコン、ストーブ、こたつ等)	99.2%	0.8%	99.1%	0.9%
湯沸器(電気温水器等含む)	93.9%	6.1%	96.4%	3.6%
社会生活				
親戚の冠婚葬祭への出席(祝儀・交通費を含む)	97.9%	2.1%	97.2%	2.8%
電話機(ファックス兼用含む)	92.0%	8.0%	97.9%	2.1%
礼服	96.3%	3.7%	97.2%	2.8%
1年に1回以上新しい下着を買う	94.6%	5.4%	92.2%	7.8%
保障				
医者にかかる	99.3%	0.7%	98.2%	1.8%
歯医者にかかる	98.4%	1.6%	97.2%	2.8%
死亡・障害・病気などに備えるための保険(生命保険、障害保険など)への加入	95.9%	4.1%	91.9%	8.1%
老後に備えるための年金保険料	97.1%	2.9%	93.9%	6.1%
毎日少しずつでも貯金ができること	74.8%	25.2%	75.0%	25.0%
住環境				
家族専用のトイレ	98.7%	1.3%	98.8%	1.2%
家族専用の炊事場(台所)	98.6%	1.4%	98.9%	1.1%
家族専用の浴室	98.0%	2.0%	97.8%	2.2%
寝室と食卓が別の部屋	96.4%	3.6%	95.0%	5.0%

*普及率=欲しくない場合は分母から除く

相対的剥奪の頻度と深さ：
「社会生活調査」2003年、2008年

2003年調査

表2 相対的剥奪スコアの分布

スコア	n	%
0	990	65.1%
1	312	20.5%
2	80	5.3%
3	61	4.0%
4	27	1.8%
5	17	1.1%
6	13	0.9%
7	10	0.7%
8	6	0.4%
9	2	0.1%
10	1	0.1%
11	1	0.1%
サンプル数	1520	
平均	0.713	
標準偏差	1.403	

2008年調査

相対的剥奪スコアの分布

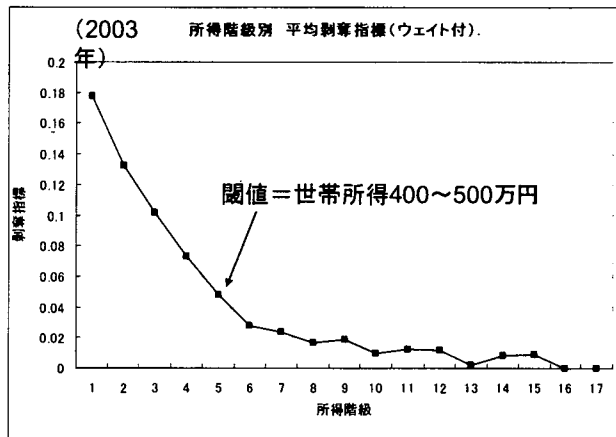
スコア	N	%
0	706	69.1%
1	212	20.8%
2	40	3.9%
3	26	2.5%
4	19	1.9%
5	11	1.1%
6	3	0.3%
7	2	0.2%
8	0	0.0%
9	2	0.2%
サンプル数	1021	
平均	0.540	
標準偏差	1.110	

どのような人々が相対的剥奪の
確率が高いか

- 低所得の人々
- 20歳代の若者、70歳以上の高齢者
- 配偶者がいない人々（特に中年層）
- 単身世帯の人々
- 母子世帯（ひとり親世帯）、離婚経験がある人
- 低学歴の人々
- 長期失業（1年以上）の経験がある人
- 15歳の時点での生活苦がある人
- 病気やけがなどで学業や就業に支障をもたらす経験がある人
- など

所得と相対的剥奪の関係

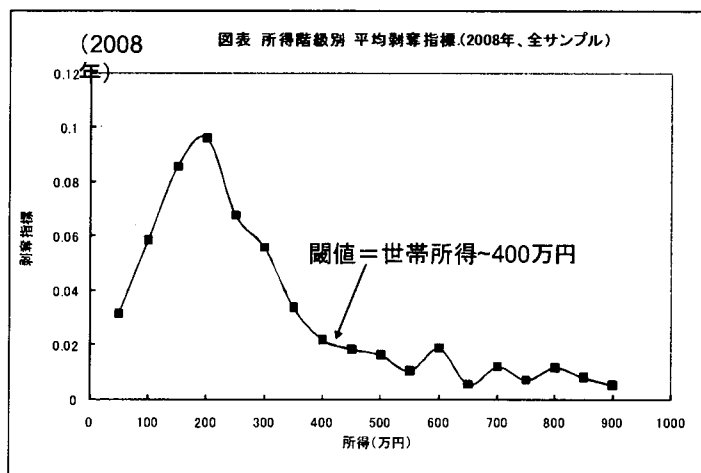
(所得階級別平均値)



剥奪指標 = [0, 1]

所得階級1 = 50万円未満、階級2 = 50~100万、階級3 = 100~200万...階級5 = 300~400万円、階級6 = 400~500万円、階級7 = 500~600万円、...階級12 = 1千万~1.2千万...階級16 = 1.8千~2千万、階級17 = 2千万以上

2008年調査でも同じ傾向



- 所得50~200万円域における違いは世帯所得の定義の違いによるものと考えられる

最終ワークショップ

2010年3月4日

(課題名) 低所得者の実態と社会保障のあり方に関する研究

研究代表者：阿部 彩 (国立社会保障・人口問題研究所)

・ 研究目的・方法・結果概要

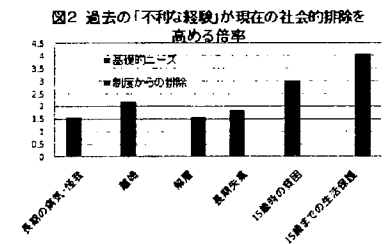
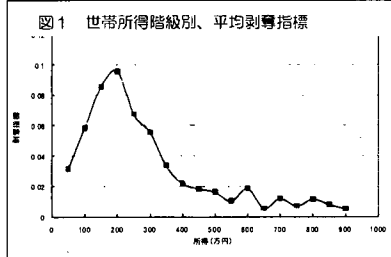
【目的】現在の日本の貧困の実態を把握し、貧困層のニーズとそれに対する社会保障のあり方について給付と負担の両面から考察する

【方法】相対的剥奪・社会的排除に関する全国調査の実施、大規模調査による低所得層の計測、マイクロシミュレーションによる制度設計、制度分析等

【主な結果】相対的剥奪は世帯所得400万円以下でそのリスクが急増(図1)、子ども期の貧困、解雇経験等は社会的排除のリスクを増加(図2)、社会保険料は制度間において負担の格差、国際比較からみた日本の貧困の特徴、生活保護世帯と低所得世帯の消費行動の違い、ホームレス自立支援策の課題、高齢女性の貧困と年金の分析等

・ 政策への反映方法の提言

- ①相対的剥奪を用いた生活水準の測定方法は、本研究で改めてその実用性と頑強性が確認された。このような指標を用いることにより、所得による貧困測定を補完し、最低生活費の妥当性の検討などの制度設計に役立てることが可能である。
- ②公的医療保険の不公平を改善するためには、国民健康保険、被用者保険に共通の応能負担の原則で保険料を課すことが望ましい。
- ③高齢期の女性の貧困削減のために最低保障年金の確立、国民年金の免除期間中の算定年数率を引き上げが考えられる。
- ④福祉貸付制度のフォローアップ調査の必要性、ホームレス対策の自立支援センター、路上アプトリーチ等の政策提言



過去の不利が現在の社会的排除
に及ぼす影響
～2008年社会生活調査の分析～

非金銭的な生活水準の計測の試み

前回：2006年「社会生活に関する実態調査」

- サンプル数＝584
- 対象者：東京近郊の川崎市において住民基本台帳より無作為抽出した成人男女1,600人

本調査：「2008年社会生活調査」

- 実施年月：2009年2月
- サンプル数＝1,021
- 対象者：全国の無作為抽出した地区の成人男女1,320人(地図方式)

調査の設計

- 経済的困窮のみならず、社会的困窮も把握すること
- 社会における様々な公的constructsから排除されているさまを把握すること
- 公的のみならず、私的な領域からの排除も把握すること
- 個人の社会における活動度も把握すること
- 各項目の「欠如」は非自発的なものであること(自発的, i.e. 選好による欠如を除くこと)=強制された欠如
- 非自発的な欠如の理由は、金銭的なものに限らないこと(身体的、健康、時間、体裁、…)

① 目的1:

相対的剥奪指標の再確認

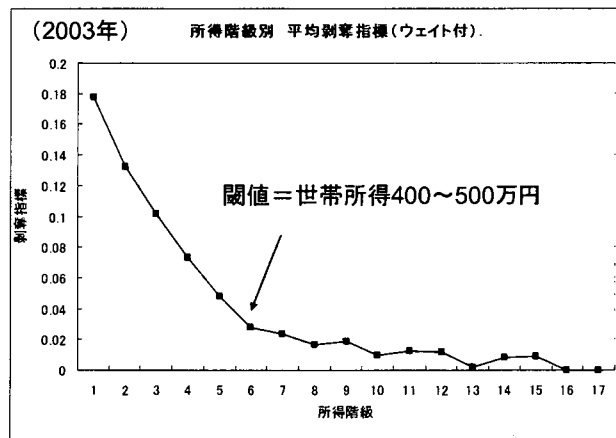
「社会生活調査」(2003年)にて確認された「閾値」は頑強な結果であったのか。

相対的剥奪指標に用いられた項目とその普及率

社会的必需項目(16項目)		(2008年)		参考(2003年)	
		普及率*	欠如率	普及率*	欠如率
設備	電子レンジ	98.0%	2.0%	98.4%	1.6%
	冷暖房機器(エアコン、ストーブ、こたつ等)	99.2%	0.8%	99.1%	0.9%
	湯沸器(電気温水器等含む)	93.9%	6.1%	96.4%	3.6%
社会生活	親戚の冠婚葬祭への出席(祝儀・交通費を含む)	97.9%	2.1%	97.2%	2.8%
	電話機(ファックス兼用含む)	92.0%	8.0%	97.9%	2.1%
	礼服	96.3%	3.7%	97.2%	2.8%
	1年に1回以上新しい下着を買う	94.6%	5.4%	92.2%	7.8%
保障	医者にかかる	99.3%	0.7%	98.2%	1.8%
	歯医者にかかる	98.4%	1.6%	97.2%	2.8%
	死亡・障害・病気などに備えるための保険(生命保険、障害保険など)への加入	95.9%	4.1%	91.9%	8.1%
	老後に備えるための年金保険料	97.1%	2.9%	93.9%	6.1%
住環境	毎日少しでも貯金ができること	74.8%	25.2%	75.0%	25.0%
	家族専用のトイレ	98.7%	1.3%	98.8%	1.2%
	家族専用の炊事場(台所)	98.6%	1.4%	98.9%	1.1%
	家族専用の浴室	98.0%	2.0%	97.8%	2.2%
	寝室と食卓が別の部屋	96.4%	3.6%	95.0%	5.0%

* 普及率=欲しくない場合は分母から除く

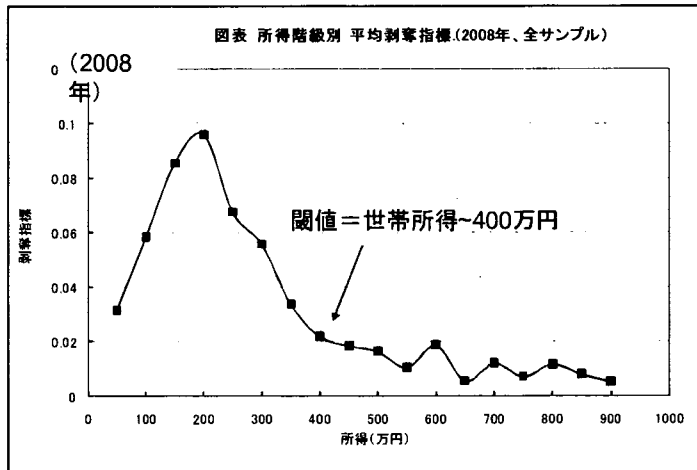
所得と相対的剥奪の関係(2003年調査) (所得階級別平均値)



剥奪指標=[0, 1]

所得階級1=50万円未満、階級2=50~100万、階級3=100~200万、階級4=200~300万、階級5=300~400万円、階級6=400~500万円、階級7=500~600万円、...階級12=1千万~1.2千万、階級16=1.8千~2千万、階級17=2千万以上

2008年調査でも同じ傾向



- 所得50~200万円域における違いは世帯所得の定義の違いによるものと考えられる

②目的2

過去の「不利」と現在の社会的排除の関係

□2006年川崎調査において見られた「15歳時点での生活意識」が現在の社会的排除に及ぼす影響は頑強な結果だったのか

□「生活意識」以外に15歳時点での生活水準を表すものはあるか

8つの次元 (Table 2 – page 8)

1. 基本ニーズ (Basic Human Needs)
2. 物質的剥奪 (Material Deprivation)
3. 制度からの排除 (Exclusion from Systems)
4. 社会関係(ネットワーク)の欠如(Lack of Social Relations)
5. 劣悪な住居(Lack of Adequate Housing)
6. 社会参加(レジャーと社会活動)の欠如(Lack of Activities)
7. 経済的ストレス(Economic Stress)
8. 所得ベースの相対的貧困(Income Poverty)

社会的排除指標の定義(次元別)

$$S_i^x = \frac{\sum_{j=1}^{J^d} d_{ij}^x w_j}{\sum_{j=1}^{J^d} w_j}$$

$S^{(1,2,3,\dots,7)}_i$ = Social Exclusion Index of Dimension (1,2,3,...7) for individual i

J^d = Number of items in Dimension d

x = Dimension 1,2,3,...,7

d_{ij}^x = 1 if individual i is deprived of item j, otherwise 0

w_j = weight (propagation rate) for item j

- 各itemの普及率でウェイトづけした欠如率
- 欠如 = Does not include those by preference

基本統計量 (Table 4)

Table 4 Basic statistics: Social Exclusion Indexes

Dimensions	# items	Social Exclusion Indexes (standardized)		Percentage of Respondents who are Excluded (Deprived)	
		Average	Std. Dev.	Threshold (# items)	%
Lack of Basic Needs	6	0.051	0.139	1	16.6%
Material Deprivation	9	0.010	0.043	1	6.3%
Exclusion from Systems	14	0.072	0.108	3	14.5%
Lack of Social Relations	9	0.099	0.187	3	12.0%
Inadequate housing	8	0.028	0.081	1	14.9%
Lack of Activities	5	0.346	0.278	4	12.5%
Economic and Financial stress	8	0.109	0.160	2	20.0%
Income poverty	1	296.8	487.487	114.6	10.9%

(*)The threshold for determining who is 'excluded' was determined by the author, to ensure that the exclusion rates will be 10% to 20% of the respondents, except for the material deprivation.

- 各項目の排除指標の絶対値にはさほど意味はない
- 排除率の計算のための「排除線」は、10～20%になるように設定

誰が排除されているか (Table 5)

- リスク・グループは、低所得のリスク・グループとは異なる
- 性別差は少ない
- 年齢別では、20歳代
- 雇用形態別では、正社員は多くのDimensionで low risk, 非正規 high risk
- 主婦、退職者を除く無職者は、very high risk in all dimensions
- 低学歴も、at risk in many dimensions
- 男女ともに、未婚、離別は at risk